

高校生への「型」を用いた論述文作成指導 — 複数の具体例から根拠を抽出する指導の試み —

徳 永 辰 通

岐阜聖徳学園大学外国語学部非常勤講師

Teaching Structured Writing Statements to High School Students: An Attempt to Teach Abstracting Rationale from Examples

Tatsuyuki TOKUNAGA

キーワード：根拠 具体例 思考力 抽象化 対比

I. 実践研究の目的

2018年3月に告示され、2022年度の入学生から年次進行で実施される『高等学校学習指導要領（平成30年告示）』では、生徒に生きる力を育むことを目指すにあたり言語活動など学習基盤を作る活動を充実させる必要がある¹⁾。そして各教科、科目の言語活動の充実は、国語科が要となり図られる。国語の各科目で挙げられている言語活動を見ると「論述」「発表」「討論」などがあり、国語の「各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い」には、「言語能力の向上を図る観点」から「他教科等との関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにすること」とある²⁾。他教科の言語活動を見ると、例えば「地理歴史」「公民」は「論理的に説明したり、立場や根拠を明確にして議論したりするなどの言語活動に関わる学習を一層重視する」よう配慮する必要がある³⁾。そのため、他教科の言語活動を円滑に進めるためにも、国語科では早い時期に言語活動の基礎的事項の指導をすることが望ましい。

言語活動の基礎的事項を扱う「現代の国語」の授業時数を見ると、「書くこと」は「30～40単位時間程度」であり、「話すこと・聞くこと」「読むこと」と比べ授業時数は多く設定されている⁴⁾。しかし、「書くこと」の言語活動例を見ると、論述のほか、手順書、紹介文、案内文、通知文を書いたり、報告書や説明資料をまとめたりと、書く文章の種類が多岐にわたっている。さらに、資料の収集・引用などの指導も必要となるため、効率的な指導が望ましい。

効率的な論述文指導として、型を用いた指導が挙げられる。後に詳しく見るが、型を用いた指導は形式的な側面においては有効であるが、内容面については指導に工夫が必要となる。さらに、『高等学校学習指導要領（平成30年告示）』の国語の目標（2）に「生涯にわたる社会生活における他者との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を伸ばす。」とあり、思考力も伸ばす論述文指導が望ましい⁵⁾。本稿は、型を用い内容面・思考面にも踏み込んだ論述文作成指導を目指し実践をおこなった、その報告である。

II. これまでの型を用いた論述文指導

型を用いた論述文指導として清道亜都子(2010)、田中宏幸・小笹由花(2010)、西森章子・三宮真智子(2015)、西森章子・三宮真智子(2018)がある⁶⁾⁷⁾⁸⁾⁹⁾。

清道(2010)は「～に賛成か、反対か」というテーマで、双括型のモデル作文を提示し文章作成指導をおこない、型を提示することが高校生の文章を量的、質的に高める上で有効であるとしている。ただし、「意見」に対する適切な「理由」が述べられているレベルには達しなかったという。

田中・小笹(2010)は、中学生に双括型を理解させた後に、個々でテーマについて「主張」「理由」「具体例」を考えさせてから、具体例が主張を支えるものとして適当であるかを生徒間で話し合い、論述文を作成している。この指導では、型の習得だけでなく、生徒間で交流することで適切な具体例を挙げる

ことに効果があるとしている。問題点として、文章作成指導に「想の形成・拡充・深化」と「型の習得・活用」をいかに融合させるかという点を挙げている。

西森・三宮(2015)は高校生を対象に「書くこと」についての意識調査をおこなったところ、65%以上の生徒が「構成する」ことに苦手意識を持っていたという。さらに高校生の作成した論述文を見ると、主張と根拠の両方を示しているものは45.5%にとどまっており、自分の主張を支える根拠、あるいは他者の主張を支える根拠について幅広く考え、それらを明確にする学習機会が必要だとしている。これを踏まえ、西森・三宮(2018)は、高校生の論述文指導に根拠産出を繰り返すトレーニングを取り入れている。このトレーニングは、ある主張(例えば「スイカは野菜でなく、果物と見なすべきだ」)を与え、それに対する根拠(例えば「なぜなら、果物の盛り合わせの中にはいっているからだ」)を挙げるというものである。このトレーニングを取り入れた結果、根拠が少ない文字数で表されるようになったという。西森・三宮(2018)は根拠について、「根拠の説得力を高める事実である、『裏づけ』への展開可能性が高い」ことから、一般化された根拠を高く評価しているが、一般化された根拠を考えられるようになるにはさらなる介入が必要であるという¹⁰⁾。

以上の研究から、型を用いることが論述文指導に有効であること、内容の指導が課題であることがわかる。内容面では特に、主張を支える適切な根拠が挙げられないという点が問題となっている。

なお、型を用いた論述文指導を段階的に発展的におこなうことを意図した学習教材に山本裕子・本間妙・中林律子(2019)がある¹¹⁾。これはアイデア整理、アウトライン作成を経て論述文作成をしていくもので、扱うテーマも立場を問うタイプ(～について、賛成か反対か)から意見を問うタイプ(～について、考えを述べよ)へと発展させている。本実践は山本・本間・中林(2019)を参考にしている。

Ⅲ. 論述文指導の実践

1. 学習者

令和2年7月に、岐阜県中京高校3年D組(23人)の現代文Bで論述文作成指導をおこなった。3年D組の生徒は、1年次、2年次にそれぞれ2回ずつ、本実践と同様の双括型で論述文を作成している。これまでに形式的な側面(ねじれ文、だらだら文、原稿用紙の使い方)、資料収集および引用の仕方の指導をしているが、内容面の指導はしていない。

学習者は1年次から毎日、日々の振り返り及びエッセイを書き、担任がチェックしていた。そのため文章を書き慣れた生徒が多かった。なお、このクラスは23人中15人が国公立大学に合格している。

2. 授業展開

1 時間目

まず、本単元のねらいを説明した。次に論述文の例を示し、論述文の型の復習と、今回用いる型の説明をした。それからアイデア整理とアウトライン作成におけるポイントを説明し、実際にアイデア整理、アウトラインの作成をした。

2 時間目

はじめに今回の論述文作成をする上でのポイントを説明した。それから各自で論述文を作成した。授業時間内に論述文を書き終わらない生徒もおり、提出は次の時間のはじめとした。

3 時間目

論述文の提出前に、論述文の形式的な側面の注意点を確認した。その後、各自で論述文の確認をし、提出した。その後、次の単元へ入った。

表 1 授業展開

時間目	指導内容・学習活動	利用したもの
1 時間目	本単元の説明 (5 分) 論述文の型の復習・説明 (10 分) アイデア整理・アウトライン作成の説明 (10 分) アイデア整理 (15 分) アウトライン作成 (10 分)	論述文のモデル ワークシート ワークシート
2 時間目	論述文作成の説明 (10 分) 論述文作成 (40 分)	論述文のモデル 原稿用紙
3 時間目	論述文の形式的な側面の確認 (3 分) 論述文の最終確認 (5 分) 論述文の提出 (2 分)	

3. 本実践で工夫した点

(1) 用いた論述文の型

論述文の型は、「主張」「根拠 1」「具体的説明 1」「根拠 2」「具体的説明 2」「予想される反論」「再反論」「主張の確認」を構成要素に持つ、図 1 の双括型を用いた。ここで「根拠」と呼ぶのは、「～だから」を用いて示される部分である。同様の部分を「II. これまでの型を用いた論述文指導」で挙げた清道 (2010)、田中・小笹 (2010) は「理由」と呼んでいる。一方、西森・三宮 (2015)、西森・三宮 (2018)、山本・本間・中林 (2019) は「根拠」と呼び、「高等学校学習指導要領 (平成 30 年告示) 解説国語編」においても「(なぜなら) ～だから」を用いて示される部分を「根拠」と呼んでいる¹²⁾。本実践では「高等学校学習指導要領 (平成 30 年告示) 解説」に従い「根拠」を用いた。

本実践で用いた型は他の言語活動にも応用できる。「現代の国語」の言語活動例で挙げられている「発表」、「討論」においても、「主張」「根拠」は必須な要素である。そして、いずれの活動も様々な立場から考える必要があるため、「予想される反論」、「再反論」も必要な要素となる。図 1 の「型」に見られる構成要素は、論述のみならず発表、討論においても必要な要素であるため、汎用性の高いものである。

私は～に賛成/反対である。〔主張〕
まず〔根拠 1〕だからである。〔具体的説明 1〕。
次に〔根拠 2〕だからである。〔具体的説明 2〕。
たしかに〔予想される反論〕。しかし〔再反論〕。
以上のことから～に賛成/反対である。〔主張の確認〕

図 1 論述文の型

(2) 論述文の型の復習・説明

「型」を用いた論述文指導では、主張を支える適切な根拠が挙げられない点が問題であった。西森・三宮 (2018) は「根拠の説得力を高める事実である、『裏づけ』への展開可能性が高い」ことから一般化された根拠を評価している。本実践は西森・三宮 (2018) に倣い、一般化された根拠を挙げることを目標に指導をした。根拠が一般化されているということは、根拠に含まれる具体例が複数存在するということであり、根拠が上位概念、具体例が下位概念となる。

福沢周亮・藪中征代 (2017) は、具体的に考えることでわかりやすくなり、抽象的に述べることで効率よく考えたり、規則性を見つけて予測したりできるようになるとし、「具体的にだけ考えるとか、抽象的にだけ考えるということだけでなく、抽象の階段を絶えず上下しながらいろいろなことを考えていかなければならない」としている¹³⁾。そこで、論述文のモデルは、根拠と具体例が上位概念、下位概念となるよう、一つの根拠に複数の事例が挙げられている山本・本間・中林 (2019) の論述文の例を用いた¹⁴⁾。図 2 にその一部 (図 1 で言うところの〔主張〕、〔根拠 1〕、〔具体的説明 1〕の部分) を示す。型の復習・説明では、論述文の例をプロジェクターで投影し説明した。

テーマ「この 200 年間における最大の発明」

私は最大の発明は電気の実用化だと考える。理由は2つある。

まず、電気がなかったら現代社会では生活が成り立たないからである。私たちは、多くの電化製品に頼って生活している。夏の暑さにはエアコンが欠かせないし、寒い季節の暖房器具も電化製品が多い。電子レンジや冷蔵庫、洗濯機、照明機器がない生活はたいへん不便なものであることが容易に想像できる。さらに、交通手段や通信手段も電気によるものが大半である。電車はもちろん、電気自動車も実用化されつつある。また、携帯電話も充電することなしには使えない。電気が使えなくなったら、その瞬間から日常生活に支障をきたすことは、多くの災害時に経験している。

図2 説明に用いた論述文の例

二重下線部「電気がなかったら現代社会では生活が成り立たないから」という根拠と、具体的説明で挙げている下線部「多くの電化製品に頼って生活している」と、「交通手段や通信手段も電気によるものが大半である」とが「抽象—具体」の関係になっている。

(3) テーマ

論述文のテーマは「仲間と旅行に行くなら電車がいいか、車がいいか、800字で述べなさい。」という立場を問うタイプとした。学習者は書き慣れているため、立場を問うタイプよりも意見を問うタイプのほうがよかったとも思われるが、「(4) アイディア整理」で示すように、アイディアの整理や、論述文に対比を取り入れる指導がしやすいため、立場を問うタイプのテーマとした。

(4) アイディア整理

田中・小笹 (2010) は、生徒に「主張と理由」を書かせてから具体例を書かせているが、この時点では、多くの生徒が「主張と理由」を支えるものになりそうもない具体例を挙げていたという。その後、同じ主張の生徒同士でグループを作り、より納得できる具体例を話し合わせた結果、主張と対応しない具体例を挙げる生徒は大幅に減少したという。そこで、田中・小笹 (2010) を参考に、アイディア整理の初めの5分は各自でおこない、その後10分は周辺の生徒と話し合わせた。

田中・小笹 (2010)、西森・三宮 (2018) は「主張と理由」から具体例を考えさせている。この手順であると、「抽象の階段を絶えず上下しながらいろいろなことを考えていかなければならない」とする福沢・藪中 (2017) とは異なり、抽象的な主張・根拠から具体例を考えるという一方向的な思考となってしまう。そのため、アイディア整理では、具体例を書き出し、複数の具体例から根拠を抽出した後に主張を決めた。

山本・本間・中林 (2019) は、アイディア整理ではワークシートを用い、アイディアをできるだけ具体的に書くよう指示している。本実践ではこのワークシートと同様の図3のようなものを作成し、配布した。本実践で扱った立場を問うタイプの論述文の場合、それぞれの立場の利点、欠点を考える必要がある。そこで、車で旅行する場合の利点をA、欠点をBに書かせ、電車で旅行する場合の利点をC、欠点をDに書くよう指示した。この場合、AとD、BとCとが対応することになり、対立がとらえやすくなる。対立がとらえられると、論述文に対比を用いて書きやすくなる考えた。

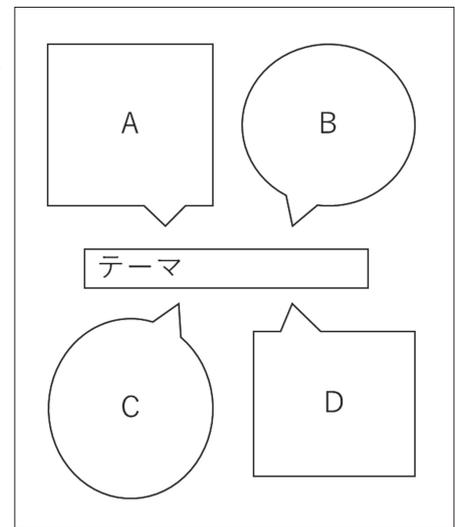


図3 アイディア整理のワークシート例

(5) アウトライン作成

アウトラインの作成には、主張、根拠1、具体的説明1、根拠2、具体的説明2、予想される反論、再反論、主張の確認、の各構成要素を記入するワークシートを用いた。具体的説明では、できるだけ対比を用いることを指示した。さらに、複数の具体例から根拠を抽出し、根拠を支える具体例はなるべく複数挙げるよう指示した。その後、各構成要素を簡潔に記入し、論述文の流れをイメージさせた。

(6) 論述文作成

論述文作成では、対比を用いる場合「一方」「それに対し」が用いやすいことを確認し、根拠を支える具体例はできるだけ複数挙げるよう指示した。そして、二つ目の具体例を挙げる際、図2の波線部のように「さらに」が用いやすいことを説明した。

(7) 論述文の提出

授業時間内に書き終えない生徒もいるため、論述文の提出は次の授業のはじめとした。

提出前に全員に形式的な側面（ねじれ文、だらだら文、原稿用紙の使い方）の注意点を意識させるために、各自の意見文に不備がないか確認をさせ、不備があった場合は赤ペンで修正させた。

IV. 考察・分析

1. 考察・分析の対象

添削した論述文を生徒に返却したときに、本稿を執筆する旨を説明した。そして、本稿執筆に用いることを許可する生徒に意見文の再提出を求めた。その結果、23人中19人が論述文を再提出した。

以下、19人の意見文を分析していく。

2. 考察・分析

(1) 論述文の型

19人全員が提示した型（図1）を用いて書いていた。そのうち2人は根拠と具体例を3つ挙げていた。この型で書くのが5回目ということもあり、型は身についていた。

(2) 字数

今回、論述文は800字以内で書くこととした。生徒の書いた字数の分布を表2に示す。90パーセント（今回の論述文では720字）以上書いていた生徒は19人中17人であった。一方、最も字数が少ない生徒は581～600字の1人であった。この生徒は論述文の型は整っていたが、一つ目と二つ目の具体的説明を見ると対比を用いておらず、根拠を支える事例も複数挙げていなかった。アイデア整理の時点で複数の事例を挙げられなかったか、複数の事例を挙げていたもののアウトライン作成時に根拠を抽象化できなかったものと思われる。それが文字数の少なさに繋がったのであろう。

表2 字数の分布

字数	人数
581～600	1
701～720	1
721～740	0
741～760	2
761～780	4
781～800	11

(3) 対比

19人中16人が具体的説明に対比を用いていた。

主張 「車で行く方が良い」
 まず、気が楽だからである。電車の場合友達と大声で騒ぐと周囲に迷惑をかけてしまうため、気を遣い余分に疲れてしまう。一方で車の場合は自分たちだけの空間であるためリラックスした状態で楽しむことができる。また、電車内だと匂いのするもの、例えばコンビニによくある焼き鳥などを食べたい時、周囲にどう思われるかを気にしてしまい、少し食べづらい。しかし、車であれば気の知れた友達しかいないため気にする必要はない。

図4 Aさんの例

図4では、一つ目の破線部「電車の場合友達と大声で騒ぐと周囲に迷惑をかけてしまうため、気を遣い余分に疲れてしまう」という電車の欠点と、一つ目の下線部「車の場合は自分たちだけの空間であるためリラックスした状態で楽しむことができる」という車の利点とを、対比を用い述べている。その後、匂いのするものを食べたい時に電車では「周囲にどう思われるかを気にしてしまい、少し食べづらい」ことと、「車であれば気の知れた友達しかいないため気にする必要はない」こととを対比させ述べている。

立場を問うタイプの場合、対立がつかみやすいこともあり、多くの生徒が対比を用いて書いていた。

(4) 複数の具体例と根拠

①複数の具体例が根拠を支えているもの

アイデア整理では複数の具体例から根拠を抽出するようにし、できるだけ根拠を支える具体例を複数挙げて論述文を作成するよう指示した。具体的説明に複数の具体例を挙げていたのは19人中17人であった。この17人のうち、複数の具体例から根拠を抽出できていたのは16人であった。この16人のうち2人は、一つの具体的説明では複数の具体例から抽出できていたが、もう一つの具体的説明では複数の具体例から根拠が抽出できていなかった。複数の具体例を挙げていても、根拠を支える具体例となっていなかったのはこの2人を含めた計3人であった。

まず、複数の具体例から根拠を抽出できている例を図5に挙げる。

主張 「電車で行く方が良い」
もう1つは、車の方が自由だからである。出発時間も行程も、休憩や食事のタイミングも、何もかもをダイヤやレールに縛られることなく、好きなように選択できる。さらに車内での過ごし方も、電車に比べて自由だ。電車の場合は、乗車中他の乗客に迷惑をかけないように気をつかう必要があるが、車なら音楽を流したり大声で会話したりしても問題ない。

図5 Bさんの例

図5では、主張「車で行く方が良い」の根拠として「車の方が自由」であることを挙げている。その根拠を支える具体例として、「出発時間も行程も、休憩や食事のタイミングも」も「好きなように選択できる」ことを挙げ、さらに「車なら音楽を流したり大声で会話したりしても問題ない」ことを挙げている。複数の具体例が根拠を支えるものとなっている。

もう一つ例(図6)を挙げる。

主張 「電車で行く方が良い」
まず、車で目的地まで行くことは、様々な面で楽であるからだ。車は電車と違い運転する必要があるから逆に大変ではないか、と思う人もいるだろう。確かに、そういう面では大変だが、旅行には多くの荷物を伴うことを考えてみてほしい。電車の場合、電車に乗り降りする時、いつでも重い荷物を持って移動しなければならない。これでは目的地に着くまでに疲れてしまいそうだ。車の場合、このような重労働をしなくて済む。また、気持ち的にも楽である。車の場合、自分と仲間だけの空間であるため周囲を気にすることなく会話を楽しんだり、歌を歌うことだってできる。もう1つ楽なこととしては、車は電車と比べて時間に縛られすぎないということである。例えば、田舎に住んでいる人の場合、乗ろうとしていた電車を逃してしまうと、1時間または2時間も次の電車を待たなければならないということもある。その1本の電車を逃しただけで、旅行のプランは崩れてしまうことになる。前から楽しみにしていた旅行が台無しだ。一方で、車はこういうことがないため、気持ちの面でゆとりがある。

図6 Cさんの例

図6は、主張「車で行く方が良い」の根拠を「様々な面で楽であるから」としている。そして、一つ目の下線部で、車の場合重い荷物を持って移動しなくて済むことを挙げている。そして「気持ち的にも楽」であることとして、車では「周囲を気にすることなく会話を楽しんだり、歌を歌」えることを挙げている。さらに「もう1つ楽なこと」として、車は「時間に縛られすぎない」とし、電車を逃し長時間待たずに済むことを挙げている。複数の具体例が、「様々な面で楽であるから」という根拠を支えている。

②複数の具体例が根拠を支えていないもの

具体的説明で挙げられている複数の具体例が、根拠を支えていないものも見られた。それらは、具体例が利点の羅列となっているもの(図7、図8)、根拠が具体例と同レベルとなっているもの(図8)、具体例が根拠から得られる利点になっているもの(図8、図9)であった。

主張 「電車で行くべきだ」

まず、よほどの僻地でもない限りは、たいていの場所に行けるからである。今日、交通インフラが整っており、わざわざ車を使わなくてもたいていの場所への移動が可能だ。実際、電車がなければ土地勘のない場所への移動はたいへんなものになるだろう。さらに、電車であれば渋滞や事故のリスクもほとんどなく、スケジュール通りに移動することが可能だ。また電車であれば、車よりも速度が速いのも利点である。

図7 Dさんの例

図7では、主張「電車で行くべき」の根拠として、電車であれば「たいていの場所に行ける」ことを挙げている。それを支える具体例として「交通インフラが整って」いることを挙げている。そのあとの「電車がなければ土地勘のない場所への移動はたいへんなものになるだろう」が具体例と見なせそうであるが、これは「たいていの場所へ行ける」という根拠を支えるものとはなっていない。そして電車は「スケジュール通りに移動することが可能」であることを挙げているが、これも「たいていの場所に行ける」という根拠を支える具体例とはなっていない。最後の一文の「電車であれば、車よりも速度が速いのも利点である」も、根拠を支える具体例とはなっていない。複数の具体例を挙げているが、羅列になってしまっている。

次に図8を見てみる。

主張 「電車が良い」

1つ目の理由は、車よりも速く行くことができる上にガソリン代が必要ないからだ。電車の場合、車よりもスピードが速いため、移動による疲れが低減される。また、旅行に行く人数によっては車より電車のほうが料金が高くなることもあるが、電車の場合仲間内でガソリン代などを割り勘する必要がなく、お金に関してシンプルに済ませることができる。さらに電車にはトイレが設置されていたりして、車よりも安心して快適に過ごすことができると思う。

図8 Eさんの例

図8は、主張「電車が良い」とする根拠として「車よりも速く行くことができる上にガソリン代が必要ない」ということを挙げている。そして電車は車よりも速いため、移動による疲れが低減されること、「電車の場合仲間内でガソリン代などを割り勘する必要がなく、お金に関してシンプルに済む」ことを挙げているが、具体例が根拠で書いたことと同内容になってしまっている。「移動による疲れが低減される」こと、「お金に関してシンプルに済ませ」られることは、根拠である「車よりも速く行くことができる」「ガソリン代が必要ない」ことから得られる利点となっている。

そして、「電車にはトイレが設置されていたりして、車よりも安心して快適に過ごすことができる」としているが、これは根拠を支えるものではなく、具体例の羅列になっている。

主張 「電車を使うのがよい」

一つ目は、移動時間を短縮することができるからだ。当然、電車の方が車より移動速度が速いため、ほとんどの場合電車を使う方が時短になる。乗り物の中ではできる事も限られるため、長時間の移動を苦痛に思う人もいだろう。そういったストレスを軽減するため、電車を使い移動時間をなるべく短縮すべきだ。さらに、移動にかかる時間を短くおさえられれば、旅行先での観光時間を長くとることができるという利点もある。せっかく旅行に行くのだから、車の中で長く過ごすより、観光に時間を割いた方が有意義だと多くの人が考えるだろう。

図9 Fさんの例

図9では、主張の「電車を使うのがよい」の根拠として移動時間を短縮できることを挙げている。それを支える具体例として電車の方が「移動速度が速い」ことを挙げている。そして、「移動にかかる時間を短くおさえられれば、旅行先での観光時間を長くとることができるという利点もある」と述べているが、これは「移動時間を短縮」できるという根拠を支えるものではない。根拠である「移動時間を短縮」することで得られる利点となっている。

具体例の羅列（図7、図8）であると、根拠との繋がりも具体例同士の繋がりもないため、相手に伝わりづらい。具体例と根拠が同レベル（図8）であると、具体的説明で根拠と同じことを繰り返すことになり、冗長なものになる。具体例の羅列も、具体例と根拠が同レベルになっているものも、具体的説

明に複数の具体例を挙げているが、複数の具体例からうまく根拠の抽出ができなかったのであろう。複数の具体例から根拠を抽出する指導が必要であると考ええる。

具体例が根拠から得られる利点になっているもの（図8、図9）は、具体例が根拠を支えるものとはなっていない。しかし、具体例が根拠から得られる利点であるため、根拠との繋がりは認められる。これをどう扱うかについては今後の課題である。

③根拠を支えているものと支えていないものとの考察

図5～図9で挙げた、複数の具体例が根拠を支えているものと、支えていないものとを比べてみると、一つの傾向が見て取れる。複数の具体例が根拠を支えているもの（図5、図6）の根拠を見ると、「車の方が自由だから」、「様々な面で楽であるから」というように、抽象度の高いものとなっている。一方、複数の具体例が根拠を支えていないもの（図7、図8、図9）は「よほどの僻地でもない限りは、たいてい場所に行けるから」、「車よりも速く行くことができる上にガソリン代が必要ないから」、「移動時間を短縮することができるから」というように、抽象度の低いものとなっている。

根拠の抽象度が高いと、それに含まれる具体例は多くなり、根拠を支える複数の具体例が挙げやすくなる。反対に抽象度が低ければ、それに含まれる具体例は少なくなり、根拠を支える具体例を複数挙げにくくなる。複数の具体例から抽出する根拠としては、抽象度の高いものが望ましい。

V. まとめと課題

本実践は内容面・思考面にも踏み込んだ指導を目指し、立場を問うタイプのテーマで、アイデア整理とアウトライン作成時には対立をとらえたり、複数の具体例から根拠を抽出したりした。その結果、多くの生徒が具体的説明で対比を用い、複数の具体例から根拠を抽出していた。このことから、本実践は内容面・思考面において効果があったといえよう。その一方で、少ないながらも複数の具体例から根拠を抽出できていないものも見られた。複数の具体例から抽象度の高い根拠を抽出する指導が必要であると考ええる。

注・文献

- 1) 文部科学省(2019):「高等学校学習指導要領(平成30年告示)」, 19.
- 2) 1)に同じ, 47.
- 3) 1)に同じ, 77, 90, 188.
- 4) 1)に同じ, 35.
- 5) 1)に同じ, 33.
- 6) 清道亜都子(2010): 高校生の意見文作成指導における「型」の効果, 教育心理学研究, 58(3), 361-371.
- 7) 田中宏幸・小笹由花(2010): 意見文作文における文章構成法の習得と生徒間交流—アクションリサーチ実習における授業の検証—, 広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 文化教育開発関連領域, 59, 105-112.
- 8) 西森章子・三宮真智子(2015): 高校生における「自分の考えを書くこと」への問題意識, 大阪大学教育学年報, (20), 119-125.
- 9) 西森章子・三宮真智子(2018): 根拠産出トレーニングが高校生の意見文生成に及ぼす影響, 大阪大学教育学年報, (23), 3-15.
- 10) 9)に同じ, 11.
- 11) 山本裕子・本間妙・中林律子(2019): 「これなら書ける! 説得力のある小論文」, ココ出版, 東京.
- 12) 文部科学省(2019): 「高等学校学習指導要領(平成30年告示) 解説国語編」, 78.
- 13) 福沢周亮・藪中征代(2017): 「ことばによるコミュニケーションの方法」, 萌文書林, 東京, 21.
- 14) 11)に同じ, 52.